

舞鶴港に入港、上陸復員することができました。

このように、ソ連では丈夫で働ける者とか技術のある者はいつまでも使い、病人、又は当地で民主教育に積極的で、いわゆる、反動と闘える者を帰国させたように思います。

復員後も頸椎変形、右肋骨カリエスなどシベリア抑留のお土産を抱えて今日まで生き延びてきました。

シベリア抑留記

広島県 円光寺 秀頼

私は、昭和二十年八月九日、満州牡丹江掖河の部隊で初年兵教育を拝命（連隊長より）、特に現役兵である朝鮮壮丁百五十人の教育担当者として、日本軍としては初めての徴兵制度による第一号の兵士を二十年六月二十五日京城に連れにいき、この掖河において現役初年兵の教育を行っていました。初めての徴兵制度であり、各部隊とも逃亡する者続出。直接の私たち教育隊

の者だけでなく、部隊長も大して気にされてはいませんでした。が、部隊としては部隊長、班長と打ち合わせを行っていました。

八月九日のこと、朝方に爆音がしたので、自宅におられる部隊長のもとに走りしました。部隊長は素知らぬ顔で「部下には言わない方がよい、特に朝鮮人初年兵教育をしているのだから、ソ連不法侵入のことは黙っている方がよい」とのこと、その日も平常どおり初年兵教育に専念しました。

当時、私の師団は、各部隊とも留守要員だけを残して鏡泊湖の北側の山で陣地構築をしていました。八月十一日夜、本隊より「ソ連軍侵入、直ちに初年兵を連れ鏡泊湖北の陣地に集合せよ」の無線命令に従い、夜間訓練を兼ねて本隊に向かいました。

私たちが本隊に向かう途中、寧安の町を過ぎるころは朝になり、邦人（含む開拓団の人）は軍の命令を受けて続々南下しており、ほとんど女、子供で、わずかな身の回り品を両手に持ち、親は小さい子を背負い、歩けない子供は道端に置き去りにされ、それらの子が

あちこちで泣きわめくなど悲惨のきわみで、それを見る私も、これをどうすることもできず、ただかわいそうだと思うだけでした。今日考えると、中国残留孤児の中にはこのような子が中国人に拾われ、助けられて成長して……と思うのです。

しばらく行ったところで、「私は寧安市長の妻です」というふろしき包み一つを持ち着のままで逃げている一人の婦人に出会いました。市長の夫人と聞いて「ご主人は？」と聞くと「牡丹江の軍司令部に行きたきりで帰って来ず、連絡もとれません」とのこと。

その日私たちは東京城で野営することとしていたところへ、先ほどの市長夫人らがたどり着かれたので、守備隊長に話して食糧、靴下、シャツ等を配給してもらい、相当数の人に喜んでもらったことを思い出します。同時に、道端に置き去りにされた子供たちや年寄りたちのことを思うと、夜は零度以下になるし、食べ物も着るものもなかったので涙が出てとまりません。

牡丹江東京城には日本軍の大きな飛行場がありましたが、日本機は一機もおらず、そのことを承知のソビ

エト機が私らが行軍するのを超低空で容赦なく二十ミリの機銃掃射を数機が交代でやり、兵や一般邦人がどれだけやられたかしれません。戦争の恐ろしさをこれほど感じたのも、このときが初めてでした。

八月十五日で終戦となりましたが、私たちは鏡泊湖北の山中で陣地構築をしていたため、無線もソ軍に邪魔をされ、十九日になってやっと部隊長より終戦を知られ、八月下旬にはソ軍の掌中下となり、九月下旬ソ連の貨物列車に乗せられ、満州綏芬河を經由、ソ連のホールよりさらに森林鉄道により山奥に送られ、ソ連の囚人が使用していた古いブラック収容所にきっちり千人収容されました。十月五日でした。

収容所は古く、屋根も壊れ星空が見える状態。しかし周囲は新しい有刺鉄線（日本製で満州から取って帰ったもの）が張られ、四隅には望楼があり、銃を持ったソ連兵が二十四時間見張りを続けていました。その収容所まで八月下旬から一度のふろもなく、シラミに攻められ眠れない夜が続き、このころ既に気温は夜中零下十五度以下で、私たちは夏服を持ってきたので、

毛布一枚で食事はろくにももらえず、不潔さと空腹、栄養失調、睡眠不足で次々と友が倒れていきました。

昼間は伐採のダワイ・ベストレの罵声とむちでしりをたたかれての強制労働、隣の友が朝起きてみると既に亡くなっている。声を出す気力もなく、まさにこれが地獄というものかと何度思ったかしれません。

朝八時から夕方五時過ぎまで、風邪で頭が痛くても、腹が悪く下痢していても、三七度以上の熱がなければ絶対に休ませないひどいものでした。直径一メートルの松の木をノルマは一人一日三立方メートル。直径一メートルもある立木を長のこぎりで二人が引き合って切るのですが、栄養失調で力がなく、直径十センチくらいの木にさえつまずくほでした。さらに夜間たたき起こされ、零下三〇度の中で貨車の石炭おろしも苦しいものでした。

私はこのような毎日が続けるうち、幸か不幸か、シベリア特有の伝染病赤痢にかかり、森林鉄道で山をおり、ホール病院（日本人だけ収容する病院として設けられ、医者はソ連軍医、看護婦もソ連人、また炊事婦

もソ連人）に入院させられたのです。一日に六十回以上も用便、最後は血便、ついに三日間全く人事不省。友人仲間では入院した直後に既に死んだとうわさもされたようで、何しろその病院に入った百二十五人の友のうち約二〇％は亡くなっているようです。

このとき聞いたことですが、ほかの収容所では五〇％の人が亡くなっているとか。病院に入っても別に薬をくれるでもなく、食事も病人が食べるようなものでもなく、黒パン百グラムに具のない塩味のスープの毎食。入院三日後に私は幸いにも意識を回復し、医者も看護婦もハラショー（よかった）と喜んでくれました。私は、世界人類は一人と一人の交わりでは悪い人は少ないが、国という組織になると全く悪くなるとしみじみ感じさせられました。

そんな状況の中、あたりの入院者は毎日のように数人ずつ死んでいき、病院も百人足らずの患者が、一カ月たないうちに二百五十人余りに膨れ上がりました。ソ連憲法九条に「働かざる者食うべからず、各人はその体力に応じてその報酬を受けることを得」とあるの

だから、おまえたちは最低の食事なのだとたびたび病院長の言った言葉が今でも私の頭に残っています。

私は昭和十八年二月、満州第四国境守備隊に入隊、八月終戦を迎え、三年ほど抑留されて、三回ほど生死の境をさまよい、幸いにして帰ってきました。私の一生の中で忘れることのできない惨めな、余りにも過酷な一ページであり、三年が三十年以上もの抑留だと思われてなりません。まさに九死に一生を得た思いで、戦争の可否は体験した者でないとわからないと思います。

戦争済んで入ソ前後の彷徨記

岩手県 佐藤 功

私は、開戦当時の昭和二十年八月、任地龍江省の白城子憲兵分隊に勤務していた。突如として真夜中の二時、隣接する独立鉄道守備隊の被爆が始まる。緊張増せど、何が起きたか。

八月十二日命により所属第百十七師団と転進、京白線大賣駅の松花江対岸で応戦準備中、信じたかった終戦の詔勅を知り、敗戦を惜しみ感涙した当時のことをさまざまに思うのである。戦いが済んだからには首都新京への集結のため、師団とともに出発、新京郊外の寛城子に向かう。駅につくや轟音とともにソ軍のさまざまな航空機が次々と西方から入都し、乗り捨てられた貨車で引込線が埋め尽くされ、緊迫と雑然たる有様の中、ソ軍の指示による自発的に等しい武装解除となり、軍刀除く武器一切を捨てソ軍の監視下に入った。

武器を捨てた以上、軍の組織に係る必要もなく自由の身であるのに、互いに頼り合う意識のためか集団から離れまいとする者と、組織のない惨めな集団の行方を案じ、遠慮ない自策を選び、当てもない乱世へ消え去った戦友も多く、前者の私たちは、うわさのように伝わるソ軍の指示で新京西方郊外の日本軍撤退兵舎で待機することになった。

何日経ても何の指示もなく、退屈紛れに同僚四、五人で互頼模索な外出を試みた。十日余りも時が過ぎた